

[共同研究：ヨーロッパ世紀末芸術の研究]

## Thomas Hardy : *The Mayor of Casterbridge*

—Henchard の転落の意味—

中 村 祥 子\*

### 1. はじめに

*The Life and Death of the Mayor of Casterbridge* (1886年出版) (以下 *The Mayor* と略) は Thomas Hardy の中期長編小説の代表作である。この小説は彼の他の Wessex Novels と同様に、イギリス南西部 Dorset 州周辺の農村社会を背景にしており、物語の大部分はその中心地 Dorchester で展開されている。作中では Casterbridge という名前で表わされている borough である。従ってこの小説の題名そのものが、小説の舞台を何よりも明確に示していると言えよう。

勿論 Hardy にとっての Wessex は、単に「事件に対する風景的な背景ではなく」、<sup>1)</sup> Hardy が「できるだけ注意深く完全に人間の生活環境の実体を表現」しようとする時の環境そのものであり、主人公達が the Immanent Will によって翻弄される舞台となる所である。従って Hardy の描いた Wessex 地方は、19世紀のイギリス南部の農村地方であるという、時代的・地域的に具体的な諸特質を備えたものである。その点はこの *The Mayor* の背景に関しても疑いようがないであろう。

しかし従来この小説の評価に於て、この物語がそういう Wessex という背景の中で起った悲劇であるという位置付けは、必ずしも優勢だったわけではない。Hardy の幾つもの長編小説の中ではこの小説はむしろ異色なものとして見られている。Hardy の他の小説の主人公達がどちらかと言えば環境の犠牲者となっていくのと

違って、この小説の主人公 Michael Henchard は自らの性格の故に悲劇的運命をたどるとされるのである。

『カスタブリッジの町長』のもっとも目だつ特徴は、副題に「ある性格をもった一人の男の物語」(‘A Story of a Man of Character’) とあるように、ヘンチャードという宿命的な性格をもったひとりの男の人生を探求している点だろう。……これは挫折の物語であり、一個人の自我の歴史を、その破滅にいたるまで徹底的に追求することによって、人間に共通する運命の悲劇にふれていくところに、作者の主意があった……。<sup>2)</sup>

Henchard の運命を、イギリス農業の具現化と見做すことは困難である。……彼は社会の中で大変個性的で非常に例外的な人物である。彼の運命も例外的であるので、それだけ一層感動的なのである。起こりうるかもしれないが、そういう壮大な形ではほとんど起こることがないようなことである。このために、或る意味では彼は「典型」でないということが重要である。<sup>3)</sup>

「誠実で忍耐強く、自我の主張を放棄して無言のうちに消えてゆく」といった、これまでのハーディの人物に慣らされてきた読者には、このヘンチャードという人物の創造は特異であり、事実、彼の作品に独自の地位を占めている。<sup>4)</sup>

更にこうした評価に於てはたいいてい、この個性的な男 Henchard の最も特異な行動が、妻

\* 本学社会学部教授

1) ウォルター・アレン著、和知誠之助監修、和知他共訳『イギリスの小説』下(文理、1977)、p.51. 尚、次の引用文も同書 p.52.

2) 上田和夫『『カスタブリッジの町長』』、本多顕彰編『ハーディ』(20世紀英米文学案内4)(研究社、1969)所収、pp.88—9.

3) J.C. Maxwell, “The ‘Sociological’ Approach to *The Mayor of Casterbridge*,” *Thomas Hardy: The Tragic Novels*, ed. R. P. Draper (Macmillan, 1975), pp. 150—1.

4) 藤井繁「解説」、藤井繁訳『キャスターブリッジの市長』(千城、1985)、pp.474—5.

子を競りにかけて5ギニーで売った、初章での事件だとされる。小説の現実の時間は、作者が冒頭に記しているように「19世紀に入って三分の一にも達しない夏も終わりの或る夕暮れ」<sup>5)</sup>と、明確に規定されているのだが、この妻を売るといふ事件の性質が、この小説の解釈を一層現実と遊離したところへ導いてきた、と言えよう。たとえば或る批評家は、

『カスターブリッジの町長』にはどこか近代ばなれのした、伝説または民俗譚の世界の香りがただよっている。……(初章は)フォーク＝テールや伝説どころではない、もっと浮世ばなれした神話の世界の茫漠さと超時間性、超空間性をそなえている。<sup>6)</sup>

とし、

初章の長いいくつな道をとぼとぼたどる無学文盲の乾草たばね人とその妻——時空を越えた茫漠たる風景。そして村市での妻売り事件——

「これらを近代の出来事だと受けとるのは」愚者の謗を免れないと言う。

恐らくこうした解釈の典型的なものの一つは、*The Mayor* を「王権のテーマ」<sup>7)</sup>と重ねて見るという見方であろう。つまり王権の交替のテーマである。この作品が新旧の世代交替を扱ったものであるというのは一般的な見方であるが、「王権のテーマ」論は更に Henchard の激しい「性格」についての次のような解釈を重ねていくのである。「王の粗暴な行為が、王権の歴史につきものであるということは、我々のよく知るところである」と。そして *The Mayor* は

5) Thomas Hardy, *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge* (1886). 第一章の冒頭。尚、作品は Macmillan 社 Wessex Edition が決定版とされているが、ここではこの版をもとにした Papermac 版 (Macmillan, 1968) を利用した。本文中の引用文はこの版に拠る。訳するに当っては、前記 4) 藤井繁訳『キャスターブリッジの市長』及び、上田和夫訳『キャスターブリッジの市長』(潮出版社, 1971)を参考にさせて戴いた。  
6) 大沢衛「評価」, 本多編『ハーディ』所収, p. 216. 尚、次の二つの引用文も同書, p. 222.  
7) 山口昌男「王権の象徴性」, 『新編人類学的思考』(筑摩書房, 1985) 所収, p. 209. 次の引用文も同書, p. 211, pp. 207—9. 尚、初出は1969年。

次のように読まれることになる。

結論的にいえばこれが、王権のパターンの上に構築されているということ、および円環的構造は、そういった王権の儀礼的パターンに密接不可分に結びついているということなのである。たとえば、この作品に類似するものを更に挙げるならリア王がすでにそのような構造を含み、旧約におけるダビデとサウルの物語が、同じパターンの上に展開する。(J. モイナハン説)すなわち、モイナハンの指摘によれば、このパラレルな状況は次の如くである。サウル(ヘンチャード)は強力な、寛大な王であったが、気分にもむらがあり、衝動に訴えやすかった。サウルと反対にダビデ(ファーフリー)は、よく気のつく、親切な、評判の良い、精神的にも強く、抑制の利く人間であった。……更に、サウルが神の命に背いたために王権を失ってダビデにとって替えられたように、ヘンチャードも妻と娘を自然の理に背いて売り飛ばした過去の重みに耐え切れなくなった時に、事業も町長職も愛人もファーフリーの手に委ねざるを得なくなる。……すなわち、ヘンチャードの悲劇は、キャスターブリッジという小宇宙を舞台とした王の悲劇なのである。

ところで *The Mayor* の解釈は、単にこの一作の評価にかかわるだけではなく、小説家としての Hardy の全体像にも深くかかわっている。というのは、

大部分の最近の Hardy 批評家達が認めているように、Hardy を「リアリスト」もしくは「ナチュラルリスト」と見做すことは有益ではない<sup>8)</sup>

とする一つの批評の流れが存在しており、*The Mayor* はそういう Hardy 像を構成する際の強力な材料としても使われることになっているからである。従って現在の Hardy 研究に於て、この *The Mayor* をどう解釈するかという点には、様々に興味深い重要な問題が含まれていると思われる。

以下の小論では、*The Mayor* が実際にはどのような物語であるのかを、この作品を時代の文脈の中に置いてみることによって明らかにしていきたいと思う。

8) Martin Seymour-Smith, "Introduction" to *The Mayor of Casterbridge* (Penguin Books, 1986), p. 21.

## II. Henchard の最初の行為 : wife sale

*The Mayor* の第一章では、Henchard が妻子を売るという事件が起こるのだが、この事件の衝撃的な性質が、(先にも触れたように)その後の物語を解釈する際に非常に大きな影響力を持っていると言える。先ず、この点から考えてみたい。

先に見た「王権のテーマ」説をとる批評家に抛ればこの場面は次のように解釈される。

先ず第一に問題になるのはエディプスが父ライオスをそれとは知らずに殺した如く、ヘンチャードが密売のラム酒に酔って妻子を売り飛ばしたという行為の異常さである。ここでは、我々の日常の言葉でいえば人倫の常道が破られるのである。そしてほとんど原罪の反復ともいうべき罪の状況が成立するのである。このような事は普通の人間の日常生活にはほとんど起らない。ということは、エディプスもヘンチャードも、非日常性の世界に一步足を踏み入れたということになる。……それは心理的にいえば、二人の人間の非凡さを示すものであり、象徴的レヴェルでいえば規範としての「文化」の域を越えるか、または踏み外すかして「自然」の範疇に自らを知らず知らずに置きかえた事を示す。<sup>9)</sup>

また、19世紀のイギリス小説を読むには、この時代の社会の構造を正確に理解する必要があると説く Julia Prewitt Brown も、この事件の異常さを強調して次のように言っている。

ハーディの『カスターブリッジの町長』にも、幕あけと同時に、田舎のお祭りで酒に酔った男が、妻と娘を五ギニーで通りすがりの船員に売り渡す場面が出てくる。この金額は注目に価する。……もちろん小遣銭ほしさに妻と娘を売るのは、一時の狂気の沙汰である。恐ろしいことには違いないが、酔っ払った経験をもつ人であれば、多少は身につまされる面もあることであろう。しかし妻と娘を千ドル——といったほうが今日の相当額により近い——で売ったとなれば、その行為は全く違った色彩をおびるようになってくる。つまり酔っ払っていたとはいえ、マイケル・ヘンチャードは、トマス・マンの言葉を借りていえば、がっちり握ったこぶしのような生き方をする、がめつい人間なのである。従って彼の

行いは、思ったよりはるかに卑しむべきものになる。そしてこのことが、あとに続く多くの問題に関して、説明役を果たしてくれているのである。……最も重要なこととして、このような幕あけを切り抜けたあとハーディは、あらゆる種類の困難な切り換えや変化、意想外の偶然の巡り合わせなどを、いともやすやすと処理することができるようになっているのである。ヘンチャードのあの行為のあとでは、どんなわざでも可能になる。ハーディお得意の道徳的破壊の風景は、すでにでき上がっていたのだ。<sup>10)</sup>

しかし Hardy がこの事件を使うに際し、現実に Dorset 州で起ったことを、*Dorset County Chronicle* の記事を参考にして描いていることは、Hardy 自身がこの作につけた序文からも窺えることである。彼は次のように述べている。

物語の出来事は、主に三つの事件から成っている。それらの事件は、たまたま Casterbridge と呼ばれる町とその近隣の地方の現実の歴史に於ても、ここに述べられているような順序と、ほぼ同じ時間的間隔をもって生じた。即ち、夫によって妻が売り飛ばされたこと、穀物法の廃止直前に襲った凶作、イギリスの前記の土地へ或る王族の一人が訪問したこと、である。(p.v)

従って妻を競売で売るという出来事そのものは、実際に「1820年代末」<sup>11)</sup>に、Dorset 州で行われた事件がモデルになっているのである。

ところでこの時代にはこうしたことが Dorset 州での例外的な事件だったのではないという事は重要である。つまりイギリスの下層階級の間では、非公式な離婚の一つの方法として wife sale が行われていた。この事実は、*The Mayor* のこの場面を解釈する場合に一つの手掛りを与えてくれる。イギリスで「離婚が合法化されるのは1857年の法律によってである。」<sup>12)</sup>従って *The Mayor* の背景になっている時代(1830年頃から1850年代の初め頃まで)は、一

10) J.P. ブラウン著、松村昌家訳『十九世紀イギリスの小説と社会事情』(英宝社、1987)、pp. 9—10.

11) Samuel Pyeatt Menefee, *Wives for Sale* (Basil Blackwell, 1981), p. 203.

12) 浜林正夫『イギリス宗教史』(大月書店、1987)、p.243.

9) 山口、前掲書、p. 210.

般の庶民にとって法的に有効な離婚というものがそもそも存在していなかった。Lawrence Stone に拠れば、離婚に替わるこの非公式な folk custom は「中世に起源を持つが、それが行われたという形跡は18世紀末に於て遙かに頻繁になり、19世紀の間に次第に消失していく」<sup>13)</sup>ものである。また Samuel Pyeatt Menefee は非常に多くのこの慣例を蒐集・分析しており、<sup>14)</sup> その豊富な実例は、*The Mayor* でのこの事件も決して folk-tale opening<sup>15)</sup> などではなく、離婚が正式に認められない時代の、実用性を伴った遺風の一つであるという側面をもっていることを示している。

ただ、こうした習慣が「専ら下層社会の人々の間に限定されていたことと、大都市やイングランド西部に主として集中していたこと、」<sup>16)</sup>つまり決して離婚の一般的な代替物ではなかったことには留意しなければならないであろう。*The Mayor* が世に出た時、Victoria 朝社会に与えた衝撃の強さは、小説の読者層の人々にはこの習慣がなじみのないものだった点に一つの原因が求められる。

19世紀の終わりまでには、この慣例の回りを無知の雲がすっかり覆ってしまったようである。1886年に出版された Hardy の *The Mayor* は、その冒頭の wife sale が信じ難いと思われた故に、辛辣に攻撃されたのであった。<sup>17)</sup>

実際、作中で、Henchard は決して一時の衝動や酒のせいだけで妻の Susan と娘の Elizabeth-Jane を売るのではない。Henchard は仕事を求めて市<sup>いち</sup>のたっている Weydon-Priors へやって来る途中からずっと Susan に対して冷淡で、彼女を「無視し切って沈黙したまゝ」(p. 8) である。甘酒売りのテントの中で彼女

を売ると言い出した時、彼女は「Michael, あなたは前にもこんな馬鹿なことを人前で話したことがあるわ。冗談にしても、あまりに言い過ぎですよ」(p. 14) とたしなめている。彼らの間では二人が別れる話は決して唐突な事ではないのである。

彼女が水夫の Newson と共に去るに当って、娘のことが問題になった時も、Henchard は「彼女は、子供さえ連れて行ければ、そうしたがっている。ついこの間この話を持ち出した時、そう言ったばかりだ!」(p. 17) と答える。彼らの間では実際上の離婚話が娘の帰属の件も含めて、既に何度か話題になっていたのである。

Henchard はこの日の自分の行為の重点を、妻を売って金を手に入れるとか、その他競売に伴う金銭的な側面ではなくて、明らかに、再び一人になるという側面に置いている。テント内で他の客達とかわす彼の会話は初めから、家族の軛を断ち切りたいという願望に満ちたものである。

話題は悪妻のために落ちぶれる善良な男、とりわけ前途のある多くの青年の気高い目的や夢が、軽率にも早く結婚したために挫折したり、精力が使い果されたりすることについてだった。

「俺自身が全くそのとおりなんだよ」と干し草刈りは、怒りを抑えて苦々しく吐き捨てた。「俺が結婚したのは18だった、全く馬鹿だったよ。それがこのさまだ」男は手を上げて自分や家族を指し、その身なりの貧しさを示そうとした。……

「俺が持っているのはせいぜい15シリング。だが、仕事にかけちゃ誰にも負けない腕を持っているんだ。まぐさ作りでこの俺を負かす者がいればイギリス中を相手にしたっていい。もしもまた自由の身となれば、そんなことしないまでも、俺には千ポンドの値打ちがあるんだが。しかしだ、こんなちょっとしたことさえ、やってみせる機会がなくなってしまうまでは、誰にもわからんのだから。」(pp. 12-3)

Henchard の wife sale の発想は、従って、当時の慣例通り、彼にとっては離婚の非公式な代替物とつながっているのである。この競売が始まる時、Henchard が、さあ「競りをやってくれるのは誰だ?」(p. 15) と呼びかけると、甘酒

13) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (Penguin Books, 1985), p. 35.

14) cf., Menefee, *op. cit.*

15) Robin Gilmour, *The Novel in the Victorian Age* (Edward Arnold, 1986), p. 190.

16) Stone, *op. cit.*, p. 35.

17) Menefee, *op. cit.*, p. 4.

を飲んでいた客の一人が即座に競売人の役を買って出るといふのも、このテント内の人々が、こうした慣例とその意味とに全く不案内であったわけではない事を示している。水夫が5ギニーと5シリングの金を提供した時、Henchardは、

「俺は金をとる、あの水夫はお前を連れて行く。わかり切ったことだ。そんなこと、どこでもやっている——どうして、ここでやってはいけぬのかね？」(p. 17)

とうそぶくのである。

一方別れた Susan も、その後十数年間は、「あの取り引きには何か厳粛な、束縛するものがあると信じこんでいた」(p. 76) のである。つまり彼女は人の掟のどれかのレベルでは、それが正式な離婚に匹敵するものと思っていたのである。彼女は無学で単純で、何事も信じやすい女性であることが、しばしば強調されるのだが、そういう人物であればこそかえって、古くからのしきたりとしてそれに従う気になったのであろう。金銭のやり取りも、離婚の代替物としての wife sale では、むしろ契約を正式なものとするために(その他の細々とした取り決め<sup>18)</sup>と共に) 必須の形式とされていた側面もあったようである。

もっとも、Henchard のこの行為が当時の Dorset 州に於ては人倫にもとる大罪という性質のものではないとしても、納得していない Susan に対して非常に残酷なやり方であることには変りがない。現に Henchard がテントの外で行なわれている家畜の競りの声に刺激されて妻を売る事を思いついたというのは、この慣例の実体や形式がどうであれ、妻子を品物扱いしていることを示している。Henchard は後に、自分の半生を振り返って、「感情の面で犠牲にしたもの」(p. 318) がいかに多かったかを後悔するようになるのだが、恐らくその時の Henchard はその最大のものとしてこの事件の

ことを考えていたはずである。

それでは何故 Henchard はそんなにまでして再び一人になりたいと思っているのだろうか。彼は

「まぐさ作りでこの俺を負かす者がいればイギリス中を相手にしたっていい。もしもまた自由の身になれば、そんなことしないまでも、俺には千ポンドの値打ちがあるんだが」(p. 13)

と言っている。つまり彼にとっては千ポンドという自分の値打ちを十分に発揮させるためには、妻子が足手まといでしかないのである。

この事は Henchard の野心の内容と、彼の置かれている立場とをよく示している。彼は干し草刈りの仕事を求めて移動する農夫である。最初彼が Weydon-Priors への道に姿を現すまで、どこに住んでいたのかは一切明らかにされないが、彼が妻子を連れ、仕事のある所で雇われて干し草刈りをする賃金労働者であったことは確かである。19年後に彼は「俺は干し草刈りの労働者として出発した。それから18になった時、この職業を頼りに結婚したんだ」(p. 80) と言っているし、25年後彼が Casterbridge を出て行って、再び同じ仕事に就いた時、彼は次のように描写されている。

ついに彼は、彼本来の仕事である干し草刈りの職を得た。この種の仕事がちょうど秋で、要求されていたのだ。彼の雇われた場所は、旧西街道の近くの牧羊農場だった。……こうして Henchard は、かつて四半世紀前に占めた地位にそのまま、また戻ることになったのである。(p. 319)

こういう臨時農業労働者にとっての家族とは、その扶養をどうするかという側面から、絶えず関係が危機に傾せられる存在なのである。第23章でも、Casterbridge で開かれた年に一度の雇用市で、農業労働者の一青年がづらい選択を課せられる場面が描かれている。この青年には老父がいて、その老人もどこかの農場で働かねばならない。しかし雇い主は

18) たとえば首に引綱をかけるとか、市(いち)の負担金を支払う、など。cf. Menefee, *ibid.*

若者抜きで老人を取ろうとしなかった。ところが、息子には今の農場に恋人が居た。彼女は側に立って、唇に血の気をなくして結果を待っていた。

「君を残して行くのはつらいな、Nelly」と若者は心をこめて言った。「しかし親爺を飢え死にさせる事はできない、マリアの受胎告知日からあぶれているんだ。たった35マイルだから。」(p.162)

ここでこの青年は、恋人と別れて父親と共に遠方の農場で働こうとしているのである。この場面では、Henchard のライバルになる、若い Donald Farfrae が三人を救ってやるので、真の悲劇へは発展しないのだが、それでもこれは土地を持たない農業労働者達が、家族関係や人間関係を壊される危険性の下に常に置かれていることを示すものである。

ところで、こうして Henchard は家族の軛を逃れて再び「自由の身になる」のだが、それは当時の農業労働者達の置かれている不安定な家族構造をよく示していると同時に、Henchard という人物の野心の強さをも表わしている。彼はその後20年近くの間はいわゆる「上り坂」(p.319)を登っていったのだから、彼のこの時の自信はそれなりに根拠のあったものと言えよう。勿論彼は妻子と別れた翌朝、ラム酒の酔いが醒めた時即座に自分の行為を後悔する。しかしこれは彼が再び家族と共に暮す生活を、何を犠牲にしても取り戻そうとすることではない。彼は自分のかねてからの野望と引き換えに要求されたものの余りの大きさに、一瞬たじろいでいるのである。彼は妻子を探しに行く前に教会で一つの誓いをたてる。

「わたしこと、Michael Henchard は9月16日のこの朝、この聖なる場所で、これから21年の間一切酒を断つことを誓います。……もしわたしが、この誓いを破りましたなら、どうぞ耳なり目なりどんな力をも奪って下さい！」

そう言い終り、その大きな聖書に接吻して、干し草刈りは立ち上ると、いよいよ新しい方向へ出発したという、ホッとした様子が見られた。(p.22)

つまり Henchard は自分の行動を明らかに恥じてはいる。しかし彼はそれを酒の酔いだけ

のせいにした。彼は自分の野心の方を「断つ」ことは全然念頭にないのである。まだ妻子を見つけ出す前に Henchard の感じるこのホッとした安堵こそ、自分が本来の目標に向けて出発するための免罪符を、酒という好物と引き換えに手に入れたことに対する解放感でもあるだろう。

### Ⅲ. Henchardの成功

Henchard の野心はポケットの中の「15シリング」を「千ポンド」に替えることである。これは彼が資本主義的農業の仕組みの中で「より高いこと」(p.319)を達成し、「人間の改善の可能性」(p.319)を試してみようとするのである。そしてこの野心を達成するために彼が妻子と別れたこと、それも、現実に5ギニー(約5ポンド強)という金と引き換えに彼女らを買ったことは、彼がモラルの点でもその資本主義的農業を推進させる側に組み込まれたということを示している。勿論、彼が実際にその金を何に使ったのか、妻子の探索費に使ったことが明らかな一部を除いては明確ではないのだが、彼はそういう不浄な金には一切手を触れないという程には潔癖ではないのである。

ところで彼が Casterbridge で成功した時、その中身は次のように描写される。

「あの人は市会一番の有力者でね、このかいわいでも全くがえらいお人だ。小麦や、大麦や、からす麦や、干し草や野菜などの大きな取り引きで Henchard さんが手をつけていないようなものは一つもないときている。うん、その上他のことにも手をつけようとなさる。……今じゃ町の大黒柱でね。裸一貫から道を開きなさったのだ。」(pp.39-40)

Henchard は資本主義的農業社会の典型的な一つの仕事である穀物問屋として成功しているのである。Casterbridge には他にも多くの商人達が住んでいる。金物屋、桶屋、馬具屋、車大工や道具屋、薬屋、手袋屋や革細工屋など(p.33)である。しかし穀物問屋がこれらの商人達と根本的に異なるのは、前者が農作物、特に主食になる穀物を投機の対象にし、その投機によって一獲千金の可能性を持っていることである。つ

まり「トランプ室の四角い緑色の台でやるのと同じように、四角い緑野でも容易に博打ができる」(p. 189) ことである。無一文の Henchard が「町の大黒柱」になれた背景には、この法則が彼に幸運に作用するという局面が幾度もあったはずである。

小説の中では Henchard がこの19年間にどのようにして成功していったのかは具体的に描かれていない。が、その過程は「弟のような」(p. 52) 穀物商 Farfrae のやり方がそっくり示している。

Donald Farfrae は Durnover Hill の或る場所で、自前の店を開いた。……町は狭かったが、穀物や干し草の取り引きは比較的多く、青年は、生来の賢明さから、それに一枚加わる機会を見て取ったのだ。……このスコットランド人の商売は伸びていった。……彼が手を触れたものは何でも成功した……。(pp. 116—7)

彼は自分がいかにして金儲けをしたかについて、後に結婚する Lucetta に、初対面の時次のように自慢している。

「あそこに茶色のカンミア織りの服を着た男が見えるでしょう？僕はこの秋、小麦が下がった時あの男から沢山買いましたね、それから少し値が上がった時全部売り払ったのです！ほんの僅かしか儲けにはなりませんでしたが。農夫達はもっと値の上がる事をねらって、しまい込んでおいたのです——ええ、ところが鼠が稲叢をかじって空にしてしまいました。僕が売った時、ちょうど市場の値が下がってきたので、手放さずに握りしめていた連中の小麦を、最初に買った時より安い値で買い占めたのです。それから……何週間かして、また値が上がってきた時に売ったんですよ！こんな風にして僅かの儲けに満足して何度も繰り返し、やがて五百ポンド儲けました……ところが、他の連中は手元に置いといたものだから少しの儲けにもならなかったのです！」(pp. 160—1)

Henchard が登った成功の階段も、この時の Farfrae と似たようなものであっただろう。従って Henchard が市長（「市会一番の有力者」）であるというのは、彼が「農業によって生きて

いる」(p. 65) Casterbridge の「穀物問屋・干し草商 Henchard」(p. 62) だからである。

この市長の主催する大晩餐会で、19年後の Henchard が初めて読者の前に姿を現わす、というのは興味深い。これは一つは Henchard の現在の高い地位を最も象徴的に表している。と同時にここで問題にされる或る事件が、これまでの彼の成功を押し進めてきた力が何であるかを示しているからである。つまり彼は、Casterbridge では過去70年間一度も売られたことのない程ひどい小麦を最近売ったのだが、その責任をこの場で問われる。この事件は、小麦が貯蔵しうるという性質が単に食料として有益であるばかりでなく、それが投機の対象になり得るということ、従ってもし貯蔵の仕方が不十分であったり小麦そのものが不良の場合、小麦のその後者の価値も低くなってしまおうということを示している。更にこの事件に対する Henchard の対応は、彼が野心を達成することができるだけ十分に、冷酷な「性格」を備えていることを表している。

彼からひどい小麦を買わされた町の製粉屋やパン屋などの小売商人や、そのパンを食べさせられる貧乏人達に向って、Henchard は次のような言い訳をするのである。「大きな取り引きでの事故は、諸君も大目に見ていただきたい」(p. 41)と。Henchard は意識的には常に良心に従って生きてきた。彼は「決して不当に他人を罵倒したことがない」(p. 40)と噂され、貧しい人夫 Whittle の老母には「前の冬中石炭やその他余り物などをやっていた」(p. 103)りする。しかし穀物問屋としての彼にとっては、「大きな取り引きでの事故」はやむを得ないものとされる。何故なら「私からそれを買ったパン屋と同様、私自身それを買う際に騙されたのだ」(p. 41)からである。

Henchard も、「干し草の取り引きで自分を出し抜こうとしていた詐欺師を逆に出し抜いた」(p. 40)というようなやり方で、富を築いてきたのである。彼が Farfrae に対抗して後に行う大きな投機で、彼は占い師の天気予報を当てにして失敗したので、しばしば Henchard

は「文明とか、教養とか、近代的個人主義などといったものとはまったく無縁の、原始さながらの本能的エネルギー、生の根元衝動としかいようのないもの」<sup>19)</sup>を所有した人物と規定される。が、彼はその投機を後悔して「これまで俺が全然やったことのないこと——つまり早まった投機だった」(p.210)と表現している。彼の行り取り引きや投機の大部分は慎重なものであったはずである。<sup>20)</sup> 彼が「荒っぽいが俊敏な認識力、容赦しない直行性」(p.200)を持ち合わせていることは、治安判事としての能力に於ても証明されてきたのである。

ところで失敗した場合には「町やその近辺でこれまで Henchard の名前になっていた莫大な農産物はもとより多くの不動産が銀行家達の手に入る」(p.190)という程の大規模な投機をするにもかかわらず、「満潮の変わり目を干潮の変わり目と誤解した」(p.189)ということ、しかも判断の根拠として古い師の予言を用いたということは、やはり Casterbridge での彼の限界を示していることは確かである。もともと彼が Casterbridge で成功することができたのは、この町の特殊性が彼に有利に働いたためであった。

Casterbridge は古い市場町であり、州都という中心地であり、「何世紀もの間巡回裁判の開廷地であった」(p.327)。その外観は四角く、「ちょうど緑のテーブルクロスの上の将棋盤のように、隣接する広大な肥えた土地に対して明確に区切られていた」(p.94)。「この町の昔の

防壁であり、遊歩道として造られた」(p.33) 壁や土手や濠がまだ豊富に残されている。その様子はこの町に初めて入って来る Susan とその娘の目を通して詳細に語られている。

この四角い形は、この古風な borough、——その当時、といってもそう遠い昔ではないのだが、近代主義の洗礼など少しも受けていなかった——Casterbridge の町でも、一番人目を引く特徴だった。(pp.31—2)

また Casterbridge が「古臭い、かびの生えたひどい土地」(p.56)であることは、「どの通り、どの小径、どの地域にも残っている」(p.73) ローマ占領時代の古代ローマの名称によっても示される。

街はローマ風であり、ローマの芸術を語り、ローマの死者を隠していた。市の広場や庭園を一・二フィートも掘れば、ローマ帝国の背の高い兵士などに会うことも不可能ではなかった。(p.73)

一方この町が古いものを残しながらも変貌を遂げつつあることは、「69年間 Durnover Moor にお日さまが登るのを見てきた」(p.40) 老人や、「この町に住みついてから45年になる」(p.87) という男達、つまりこの地方に長年住んできた者達の認識を通して示される。それは特に、村から無くなりつつある古い習俗や風習、昔の生活振りへの住人達の言及という形で表わされる。宿泊料を安くしてもらうために宿屋の給仕の仕事を手伝うという風習が、「Casterbridge は古風な町であったけれど、ほとんど廃れてしまっていた」(p.47) し、また skimmington-ride という、「内儀さんが、旦那さんを裏切った時にやる、昔からの馬鹿騒ぎ」(p.261) がこの10年間は見られなくなったこと、等々である。恐らく象徴的なものの一つは、「当時、鉄道の支線が Casterbridge の方へ延びてきていたが、まだ数マイル先に達したばかりだった」(p.265) ことであろう。定期荷馬車の御者も、「馬を使わずに運ぶのが段々盛んになってきたので、自分の仕事もすぐにおしまいになる」(p.320)

19) 上田, 前掲論文, p.90.

20) その点では J.C. Maxwell が次のように Douglas Brown を批判しているのは、半ばは——Henchard も Farfrae と同様に投機で蓄財したという点の指摘に於ては——当っていると言えよう。「Brown は…これ〔Henchard と Farfrae との生き方の差異〕が『古い田舎の世界と新しい都会の世界の間の緊張』だという以前の主張から、幾分撤退する覚悟でいる。しかし、彼はなお、現代性の一要素を強調し、Farfrae は市場経済に対処できるが Henchard はできないとしている。しかし Hardy 自身の序文は…物語の要素としての、市場の変動への全然異った態度を示している。物語の展開する場面を〔18〕40年代半ばに設定している主な理由は、その頃は収穫がその後よりも遙かに博打であり、投機を誘うものであったということにある。」Maxwell, *op. cit.*, p. 153.

と予測している。

また物語の進行中の大きな出来事には、法案 Municipal Corporation Act<sup>21)</sup> の成立があり、Casterbridge のような borough でも、恐らくそれに基づく自治体構成になったはずである。それまで「バラ [borough] の権力を握っていたのは……一部の有力者であった」<sup>22)</sup> 時代から、「バラは従前に比べかなり自由主義的な組織構成となった」のである。よそ者の Henchard が市長になったばかりか、「前例のない事」(p. 246)であるにもかかわらず「比較的若くスコットランド生れ」(p. 244)の Farfrae がこの町に住んで数年で市長になっているのも、作者が「問題探求の主要舞台として、地方都市を選んでいる」<sup>23)</sup> 理由——つまり地方都市の大きな変化——を示している。

このように古さを残しつつも変化しつつある町 Casterbridge では、多くの「成り上がり者」(p. 198) 達が登場する余地があったのである。「世間に出た頃はちょうど今のわしのようなものだった」(p. 36)と貧しい老人に言われる者達が、今では町の有力者「市会議員」(p. 36)であるし、「ハンボンガラス同様無一文で世間に出た、教区の哀れな小僧」(p. 87)が、「今では一分毎に値打ちが出る」(p. 87)と言われていたりする。Henchard も Farfrae も、こういう Casterbridge の穀物問屋として成り上がり、町の有力者、市長になったのである。

#### Ⅳ. Henchard の没落

では Henchard は何故没落するのだろうか。

彼の妻が娘と一緒にここにやってきた夜以来、何か、彼の運命を変えるものが宙に漂っていた。あ

21) cf. 「1835年市自治制法が公布され、全国画一の地方自治制度が施行されて、すべての都市に自治権が賦与され、都市の住民中不動産所有者がことごとくその自治に参与することとなった。」大野真弓編『イギリス史(新版)』(山川出版社、1970)、p. 220.

22) M. アッシュワース著、下總薫監訳『イギリス田園都市の社会史』(御茶の水書房、1987)、p. 7. 尚、次の引用文も同書、p. 88.

23) ブラウン、前掲書、p. 135.

の King's Arms 館で友人達と晩餐をとったのが、Henchard の絶頂だった。以来、彼はうまく行ってはいたが、運命は上を向いていなかった。(pp. 136—7)

このように Henchard に思える点は重要だが、これは勿論文字通りに取ることはできない。何故なら妻子が現われる前に彼は既に悪い小麦を売って町の非難を浴びていたし、Susan の出現自体はむしろ、彼女との関係を正しい軌道に乗せるための「贖罪的な行為」(p. 86)を実行するチャンスを Henchard に与えてくれたのである。娘の Elizabeth にしても、自分の娘は死んで、この Elizabeth は Susan と Newson との間にできた同名の娘だと判明するにもかかわらず、やがては Henchard にとって「憂鬱な気持のさなかにあって針の先程の光」(p. 287)になってくれるのである。

恐らく、偶然彼女達と同じ日にこの町にやって来た Farfrae の出現が、Henchard の没落の予兆となっている。事業のやり方の微妙な差が、「成り上がり者」達の成功の度合いに大きく影響を与えてきつつあるからである。Henchard と Farfrae とが「古い田舎と新しい都会」<sup>24)</sup>の対照性を示しているというのは、両者の事業の中身ではなくて(その点では Farfrae が Henchard の「死んだ弟に似ている」(p. 52)ように、二人共穀物問屋としてそっくりである)、ただ事業のやり方に於ける相違のことなのである。

Henchard のやり方は

麦袋はいつも、庭の柵みたいにみんな一列に並べてチョークで印をつけて数えていたし、稲叢は両腕を広げて測っていたし、わら束はちょっと持ち上げて重さを量り、干し草は噛んで判断する、そして毒舌をたたいて値を決めるといった調子だった。(pp. 109—10)

一方 Farfrae のやり方は「計算と測量とで」(p. 110)やり、「天秤や棹秤」(p. 222)を使う科学的なものである。二人の相違は「すじ蒔き機と呼ばれる、馬に引かせる新式の農機具」(p. 168)に対する態度にもよく現われている。

24) Maxwell, *op. cit.*, p. 153.

Henchard にとっては「機械屋の一人が成り上がりの生意気な奴の勧めで持ち込んだ、何の役にも立たないもの」(p.169)に過ぎないが、Farfrae は「それはこの辺りの種播きに大変革を起こすものだ」(p.170)と考えている。「この機械がイングランドの東部や北部では、もうすっかりありふれたものになっている」(p.170)のを知っているのである。

勿論 Henchard も時勢の変化と自分の弱点とに気付いている。彼は

「俺のような商売では、確かに丈夫な体で走り回っていれば店を構える事はできる。しかしそれを安定させるのは判断と知識だ。あいにく俺には学問がないんだ……数字にも弱い——大雑把な、経験だけが頼りの人間だ」(p.52)

と言う。彼が新しく支配人を必要としているのは、単に彼の事業が広がり過ぎて一人で見切れないためだけではない。「農作技術をより科学的基礎に立脚させる」(p.262)風潮の生まれつつある Casterbridge では、これまでの Henchard 流のやり方では徐々に通用しなくなってきているのである。Henchard が初めて出会った日にあれだけ Farfrae に好意を寄せたのは、Farfrae が支配人としての腕がありそうだからではなくて、まさに Farfrae が小麦を「精製する方法を知っている」(p.110)ためであった。

従って、彼が求めている支配人は古いタイプの Joshua Jopp ではなくて、新しいタイプの Farfrae でなくてはならない。Jopp は Henchard が「新聞に出した、支配人を求める広告に応じてやってくる」(p.50)のが「遅過ぎた」(p.69)のではなくて、彼のやり方そのものが遅れているのである。Jopp が Farfrae に先を越された後、雇ってくれなかった Henchard を憎むよりむしろ、「自分の地位を奪った男として Farfrae を嫌っている」(p.184)のは、Jopp が、自分と Farfrae との支配人としての本質的な違いに気付いているからである。従って Henchard が後に Farfrae と対立して、改めてこの Jopp を支配人に雇った時、たとえ直後の大きな投機で占い師の予言に頼らなかった

としても、その後の Henchard の転落は決っていたと言えよう。

ところで Farfrae が新しく科学的であるということは、彼のやり方による事業の儲けがそれだけ大きいことを示している。彼がまだ Henchard の下で支配人をしていた頃、彼はそれまで Henchard が取りこぼしていた利益をすくい上げてやる。

Henchard の営んでいる穀物と干し草の大きな取り引きは、Donald Farfrae の差配によってかつて見られぬ程繁盛した。……一切が Henchard の記憶に頼り、契約も口頭だけで行なわれていた彼の粗雑な口頭方式は一掃された。伝票と元帳が、「そうしましょう」とか「差し上げます」という言葉に代って用いられた。そして、そうしたあらゆる進歩の場合と同じように、古い方法の持っていた荒削りの生き生きした色彩は、その不便さと共に消えてしまった。(pp.92—3)

このことは、Farfrae が Henchard の下で支配人をしている限り強力な味方になるが、一旦商売敵になれば Henchard の敗北は目に見えているということを表わす。以前に Henchard の所で働き、今は Farfrae の雇われ人である Whittle は次のように言う。

「Farfrae 様がこの店と一緒にわしらをそっくり買われたんで。わしらにとって、前よりずっといいんです……。わしらは前よりよく働かされるけれど、もう怖い思いはさせられません。……週に一シリング安いけど、前よりゆったりしています。」(p.222)

つまり Farfrae は、Henchard のように粗暴な行為によって使用人に恐怖感を抱かせることはないけれど、彼らを多く働かせて安い賃金しか支払っていないのである。また、彼は「この商売に役立つ発明を幾つか持っている」(p.50)。それで、

大麦は——パンにしても時々ひどい鼠の臭いがして、たちまちその品質がわかってしまうのだが——Farfrae は精製する方法を知っているのです、誰も、その上をあのちっぽけな四つ足の動物が一度だって歩いたとは夢にも思わない程 (p.110)

になる。穀物が投機の対象になりうる（つまり確実に需要があるし、値が上がるまで、仕舞っておける）性質を持っている以上は、Farfraeのこの能力は、彼の一番大きな武器である。当然Farfraeの手に入るお金は多くなるのである。

Farfraeがお金に対して非常に敏感であり、彼のやり方が町の人々にも受け入れられることは、祝賀会での舞踏会でFarfraeが「一人幾らという入場料をとる」(p.105) ことによっても示されていた。恐らく、お金に対する彼の価値観を最もよく示しているのは、Henchardの元の恋人LucettaへのFarfraeの態度であろう。

Farfraeは、Lucettaが自分は「金持ちである」と暗黙のうちに認めた時（彼が彼女にする最初の質問の一つは、この点にかかわっている）、彼の注意をただちにElizabeth-JaneからLucettaに向ける<sup>25)</sup>

という指摘は興味深いものである。つまり彼にとってはLucettaは「身分や財産や、才能や美しさ」(p.196)を備えた女性なのであり、それ故に、Elizabethとは違って最初から結婚の対象になり得るのである。

一方のHenchardは「金持ちの女と結婚して富を得ようとする人間ではなかった」(p.150)。彼はLucettaが遺産を継いだことを知って、かえって結婚の申し込みを遅らせるような人物である。Henchardは破産したあと、債権者達にポケットの中の「金の懐中時計……黄色い布の小銭入れ」(p.220)に至るまで「ごまかしも隠匿もなしに」全て差し出し、文字通り一文無しになってしまう。Henchardには、Casterbridgeに於ける穀物問屋というものがどういふものか、それは決して「千ポンドの値打ち」のある「干し草刈り労働者」のことではない、ということが充分にはわかっていないのである。

HenchardがFarfrae型の穀物問屋にいずれ敗けることは、最初の頃既に予想され得る。19年振りにSusanとその娘がHenchardの前に現われた時、彼女達とLucettaとの間に立

25) Seymour-Smith, *op. cit.*, p. 43.

たされたHenchardは身の処し方をFarfraeに相談する。Farfraeはただ、その若い婦人の方に事情を説明する手紙を書くだけで、あときっぱり手を切ればよいと勧める。それに対して、Henchardは、

「それは駄目だ、どう考えたってそれ以上のことをせねば。俺は……役立つだけの金を送ってやらねば、と思うのだ——ささやかながら償いとして哀れな娘に」(p.83)

と言う。LucettaはHenchardにいつも話していたようにその後伯母の遺産を得て、Henchardの破産をも救おうと思えば救える程の立場に立つ女性である。Henchardはたっぷりある自分の「資本」(p.184)の最も有効な使い方を、必らずしもわきまえていなかったのである。

が、逆にその分だけFarfraeの冷酷さを免れているのである。Farfraeなら最初の妻(Lucetta)を亡くしても、しかるべき期間を経て再びElizabethに関心を向け替えることができる。「Farfraeにあっては『商売の糸とロマンスの糸』とは『からみあってはいるが、それでも入り交じることはない』<sup>26)</sup>」ので。Henchardが「リア王と比較されてきた」<sup>27)</sup>り、「Henchardは敗北し、不幸に見舞われても、揺るぎなく優位を占める人物であり続ける」<sup>28)</sup>というのは、まさにHenchardのこの性格——資本主義的農業の仕組みの中で成功し続けることのできない、彼の性格に因るものである。

## V. Henchardの悲劇性

Henchardは自分の没落をどのように見ているだろうか。彼の没落は、あたかもHenchardがFarfraeに個人的に負けたかのような形で起こる。Lucettaをめぐる二人の対立が、この図式を一層目立つものになっている。「求婚者の隠れたライバル意識が、彼らの商売の生活の公然とした競争に更に加えられた」(p.183)から

26) *ibid.*, pp. 43-4.

27) William R. Rutland, *Thomas Hardy ; A Study of his Writings and their Background* (Senjo Publishing, 1936), p. 208.

28) Maxwell, *op. cit.*, p. 155.

である。結婚した Farfrae と Lucetta とは、以前に市長時代の Henchard が住んでいた家を手に入れ、その家具も競売で買い占める。それを聞いた時、Henchard は次のように叫ぶ。「俺の家具も！きつと同じように俺の身体も魂も買うつもりだろう！」(p.225)

実際、無一文になった Henchard は、

己を押えて Farfrae の仕事場へ行き、日雇いの干し草刈りに雇ってくれるよう申し出た。彼は即座に採用された。(p.228)

更に Farfrae が市長になるという噂を聞いて、Henchard は次のような反応を示す。

「あの年ごろの奴が市長になるわけか、成程ね！……が、あいつを浮かび上がらせたのは彼女の金だ。……昔あいつの主人だった俺はここであいつに雇われて働いている。そして雇い人だったあいつが、俺の家も家具も、まあ女房といつていいものまで、一切手に入れて主人面をしている。」(p.229)

Henchard にとっては、現在の Farfrae の姿がことごとく以前の自分の再現であるだけに、自分を元の地位から追いやったのはまさに Farfrae であると思えるのである。従って、或る王族の一人がこの町に立ち寄った時、その歓迎式で Farfrae に恥をかかされた Henchard は

「あいつにしっぺ返しをくわしてやる。それに彼女もひどい目にあわしてやる。結局取っ組み合いになるだろう——対一でだ。そうすれば伊達男がどれほど一人の男に立ち向かえるか分かつろうというもんだ！」(p.270)

と考える。つまり Farfrae に対する個人的な復讐である。そして腕力の強い自分が Farfrae より有利にならないように、片腕を脇腹へくりつけた上で、Farfrae を呼び出し取っ組み合う。ところがこの勝負で Henchard は Farfrae を殺すことができたのに、最後の瞬間に、「俺はここへ、お前を殺すつもりで来たのだが、お前を傷つけることが出来ない」(p.274) こと

に気付く。そして「Henchard の心は恥と自責の念で一杯になった」(p.274) のである。

この事は何を意味しているのだろうか。実はこれと同じ事が、この事件より先に、Lucetta に対する彼の態度によっても示されていた。自分を捨てて Farfrae と結婚した Lucetta に仕返しをするために、彼女が「熱情に身をまかせていた最初の頃」(p.119) に、彼に宛てて書いてきた多くの手紙を、彼は二人の関係を知らない Farfrae に暴露することを思いつく。しかし Farfrae に手紙の本文は明かしても、差し出し人の名前を読み上げるところで Henchard は突然躊躇する。

彼は確かに、この芝居の最後に名前を読み上げて、大団円を成し遂げるつもりだった。……が、冷静にここに座っていると、それはできなかった。そうした心の破滅はさすがに彼を慄然とさせた。(p.247)

そして結局「彼の心は、こうした弱い女性の一人に報復を企てたことにしめつけられ」(p.251)、むしろ Lucetta が、彼女の持っているお金のために Farfrae に結婚されたことを哀れみ、「Lucetta を辱める情熱も欲望もすっかりなくしてしまう」(p.251) のである。

最後の瞬間でのこれらの Henchard の翻意は、二人に対するそれまでの彼の憎しみの大きさを思うと、理解しがたい程である。しかし彼のこうした行動こそ、まさに彼の「性格」の大きさを示していると言えるであろう。Henchard には、Farfrae や Lucetta に個人的に復讐するというような卑小なことで、自分の敗北の傷が癒されるとは思えないのである。もともと Henchard は彼らへの自分の敵意が、正当なものかどうか最初から疑問に思っている。「俺は——君を誤解していたように時々思うんだ」(p.227) と、彼は不安そうに Farfrae に言う時がある。また、Henchard の窮状を見かねた人達が彼に小さな種子商の店を持たせようと計画した時、その企画が Farfrae によって壊されたと思ったのは、明らかに Henchard の誤解であった。

Henchard はこのことを、つまり、自分の没落

を準備したものが、決して Farfrae や Lucetta 個人ではないということを感じているのである。自分を没落させる力が、自分や Farfrae をも包み込んだところで働いているのを感じている。「俺ほどの無頼漢があるだろうか！しかもその俺でさえ、『或る者』の手中にあるらしい」(p. 299) と。Hardy が Henchard を個人的な復讐などは思いとどまる程に大きな「性格」の人物としたのは、Henchard の悲劇が、単に Farfrae との間の個人的軋轢によって生じたのではなく、まさにこの「或る者」の手によって起こったものであることを示そうとしたからに他ならない。要するに Hardy は小説の表面的なリアリティを傷つけかねない危険を冒しても、作品の本質的リアリティを追求したのだと言えるであろう。

次に、この「或る者」の手について考えてみよう。Henchard と Elizabeth との関係の背後にも、同じ者の「手」が働いており、Henchard は最後にそのことを認める。物語の大半に於て、Elizabeth への Henchard の関心は、ただ彼女が自分の血を分けた娘であるということ、或いは血を分けた娘ではないということにしか置かれていない。が、Henchard が富も名声も、彼の愛した人間達からの愛もすべて失った時、ようやく彼女への人間的な愛情に目覚める。

彼女は彼の実の娘ではなかった。が今こそ初めて、彼は、もし彼女がいつまでも愛してくれさえするならば——実の娘のように好きになれるかもしれないと、かすかな夢を抱いた。(p. 287)

やがては Henchard にとってすべての望みは、Elizabeth から実の父親のように愛されることだけとなる。

彼は選択すべき二つのかたち——義理の娘が主婦になっている家の裏部屋あたりで、牙のないライオンのように暮らす彼自身の姿と、当たりさわりのない老人として、Elizabeth からはやさしい微笑で迎えられ、その夫からは善意で遇される姿を、心の中に描き出してみた。そこまで落ちぶれることは、考えただけでも彼の自尊心には恐ろしいものだった。

それでも、娘のためなら、どんなことにも耐えるつもりだった。(p. 309)

しかし Henchard のこの変化も結局は手遅れである。実の父 Newson が現われ、やがては Farfrae が恋人として彼女を要求しに来るからである。Henchard はこの義理の娘とかわらうじて一年余り、「穏やかな生活を満喫した」(p. 302) だけであつた。それも Newson に対して、Elizabeth は死んだと嘘をついたおかげであつて、つまりそれはばれるのではないかという不安と、実際に Henchard の受ける報復とを引き換えにして与えられた、一時の安息に過ぎなかつた。彼の最後は、Elizabeth からの許しを得ることなく、死んでいかざるを得ないのである。

何故、「野心の代わりに愛を得ようとした彼の数々の努力も、他ならぬ彼の野心同様完全に裏をかかれた」(p. 318) のだろうか？何故彼は「牙のないライオン」になってなお、罰せられねばならなかつたのか？

恐らくそれは、「人間の意識を超える、自然……の倫理」<sup>29)</sup>として理解されているもの、Hardy のいわゆる the Immanent Will によるものである。Henchard にこれまでの行動をとらせてきたもの、Henchard の行動の客観的に意味するものは、彼が個人的に「自説の撤回」(p. 318)をしたところで償えるという性質のものではないのである。彼は Susan と再婚することによつても、彼を最初の行為へと駆りたてたものの意味を変更させることはできない。それは資本主義的農業形態の中で彼が必然的に抱いた野心であつた。そして Elizabeth の存在自体が、Henchard が後悔し取り消そうとしたこの最初の行為の結果なのである。Henchard はそれを、「正統ならざる社会法則を支持する、『大自然』の移り身の早さ」(p. 318)として自覚する。Henchard の行動が単に不注意や悪意によるものだったなら、彼は後悔することで許されたであろう。しかし彼を支配し駆りたて

29) D. H. ロレンス著、倉持三郎訳「トマス・ハーディ研究」小川和夫監修『D. H. ロレンス紀行・評論選集』3 (南雲堂, 1987) 所収, p. 54.

てきた原理は、そういうものではなかったのである。その上、これまで多くのものを犠牲にさせて彼を駆りたててきた野心は、「義理の娘が主婦となっている家の裏部屋あたりで、……当たり前さわりのない老人として」ひっそり暮らす生活を、その代替物とする程小さなものでもなかったであろう。

Henchard の悲劇はまさにここにあると言える。彼の残す「遺言」——「俺を神聖な墓地に埋葬せぬこと……誰も俺を思い出さぬこと……」(p.333)——は、Henchard の最後の矜持と、Elizabeth が直観したように「bitterness」(p.333) とに満ちたものであり、この bitternessこそ「彼の全生涯と同じ要素」(p.333) を示すものなのである。

## VI. Henchard の悲劇の actuality

Henchard の辿った運命とその悲劇性は、19世紀イギリス南部の、農業に頼る地方都市が置かれていた状況と、密接な関係を持っていることは明らかであると思われる。が、この19世紀という時代背景については、字義通りとることに対して、しばしば疑問が呈されてきた。その場合、問題になる点は二つある。一つは小説中で扱われている時代(1830年頃から1850年代の初め頃)の解釈である。もう一つは、この時代と Hardy が実際にこの小説を書いた年代(1881年から1885年)との関連性にかかわっている。

まず前者の問題から見ていきたい。この小説の背景と一部が重なっている、「1850年～1870年代という時代はイギリス農業史上空前の黄金時代であった」<sup>30)</sup>とされている。ところが農業の繁栄のこの時期に、逆に Henchard の没落が起こっている。つまり Henchard が19年目に妻と再会して以来、「運命は上を向いていなかった」ので、彼はちょうど1850年頃から徐々に破滅へ向って行ったことになる。この矛盾から、「Henchard の運命をもって、イギリス農業の運命を要約しているものと見做すことは困難である」<sup>31)</sup>という見方が生じる。そして Henchard

30) 青山吉信他編『イギリス史研究入門』(山川出版社, 1979), p.204.

は、現実の社会の変動とは直接にかかわりのない、「過去への、古代「ウェセックス」国への、古代ローマ占領時代への、さらにまたそれよりずっと悠久に古い先史時代への、密着性を」<sup>32)</sup>持つ、「そういう世界の中を闊歩する主人公なのだ」とされる。

Henchard の野心や没落を、時代と切り離そうとするこうした試みに対しては、勿論、次のように反論することが可能である。イギリス農業の「繁栄」は総量を問題にした場合に言えることであって、個別的にはそれは土地所有者の繁栄であり、大多数の土地を持たない農業労働者にとっては、この時代はまた別の解釈ができるはずだ、<sup>33)</sup>と。ここでは更に、この時代の諸特徴との関連性に於て、この問題をもう少し詳しく検討してみたい。

Hardy は序文で、物語の時代を次のように規定している。「この物語によって呼び戻される時代」(p. v)には、

我が国の穀物法がその取り引きを制限したばかりか、今日のようにパン一個六ペンスとか、収穫期の天候に無関心でいられることに慣れている人々には、思いも寄らぬ重要な意味を持っていた

と。その事は作中で更に次のように描写されている。

当時は、外国との競争が穀物の取り引きに大変革を起こさせる直前の時代だった。まだ昔のように、月々の小麦相場も全く国内の収穫に左右されていた。

31) Maxwell, *op. cit.*, p. 150.

32) 大沢, 前掲論文, p. 219. 尚, 次の引用文も同所。

33) cf. 「生活水準が全般的にみて上昇したことはまちがいない事実ではあるが、いわゆるパイの分け前は、上層には厚く、下層には『飢餓の四〇年代』の暮らしがいくらかやわらげられた程度でしかなかったのである。…南イングランド諸州には、この時期[1870年代]にも10シリング以下の週給で暮らしを立てていた労働者も多く、彼らにとってはパン屋でパンを購入することすら贅沢であったといわれているから、この地域では、前世紀末の農業労働者の食生活とくらべても劣る暮らしが強いられていたわけである。」長島伸一著『世紀末までの大英帝国——近代イギリス社会生活史素描』(法政大学出版局, 1987), pp. 208—10.

不作とか、不作の見込みの時は、わずか二・三週間で穀物の値段が倍にもなった。そして豊作の見込みがあると、値段は急激に下落した。値段は、当時の道路のように、工学技術や水平にしたり地ならしすることがなかったために、その時どきの地方の状況に応じて勾配が急であった。(p.185)

つまり穀物法廃止(1846年)以前は小麦の価格の変動が激しく(実際、余りに激しいものだったので、製造業者達が世論の支持のもとに自由貿易の権利を獲得できたのであった)、その変動は基本的には天候によったことが強調されている。しかし小麦相場を左右したのは、勿論、天候だけではない。*The Mayor* で繰り返し描かれていたように、Henchard や Farfrae のような人物達が、豊作や「収穫間際の……値の安い時に……買いまくる」(p.191)、「買い占め」、「値が上がった時、全部売り払う」(p.160)という操作を行なったのである。こうした人為的な操作が可能な時代であるからこそ、Henchard や Farfrae のような無一文の人間が成功できたことは先に見た通りである。

ただ二人の違いは、Henchard が天候だけを投機の判断の基準に置いた(しかも論理的な根拠に基づくものではなく、大事な時に占い師に頼ってしまった)のに対して、一方の Farfrae は「精製する方法を知っている」ので、「鼠の臭いがする」ものでも、「不良の小麦」<sup>34)</sup>でも「古い穀物」(p.191)でも、「馬鹿気た値段で買う」(p.191)ことができ、「二等の上物位にはすっかり戻して」(p.51)高値で売ることができたし、豊作の間は安く買って「待っていること」(p.191)ができたのである。「忍耐を知っている」(p.191)か否かは、単に「性格」だけによるのではないのである。つまり Farfrae は、より大きな投機をより安全にやれたわけである。従って Henchard は、農作物の不作や農業の不振・不況によって没落したのではなくて、まさに「イギリス農業史上空前の黄金時代」に、投機に失敗し、より強力な投機師に敗北して没落したわけである。

34) 「収穫期の前に雨天などのため芽を出してしまったもの」藤井, 前掲書, p. 43.

次に、Henchard の没落や Farfrae の成功が起こる農村の状況は、もはや過去のものであって、Hardy がこの小説を書いていた頃には根本的に変わっていた、従って彼らの運命を時代背景とからめて読む読み方は、*The Mayor* を単に40年前の昔話の位置に追いやり、この小説からむしろ actuality を奪うものである、という議論について検討してみたい。この議論の前提にあるのは、次のことである。つまり穀物法廃止がこの二つの時期を分けており、これを境にしてイギリスの農業が変えられたという認識である。

確かに Hardy は、先の引用文でも見たように、この出来事を重視しており、Henchard の悲劇が起ったのはこの穀物法廃止の直前であったと断っている。しかし穀物法廃止の実際に意味するところは次のようなものであった。

「穀物諸法」は1846年の6月に撤廃されたが、…その効果はほとんど期待されたものではなかった。価格の低下もなく、事実、1851—5年の5年間の平均は、1841—5年の5年間の54シリング9ペンスに対して56シリングだったのである。<sup>35)</sup>

従って、この穀物法廃止によって穀物の価格がたちまち天候に左右されなくなったり、安く保たれたりしたわけではない。

が、勿論この出来事は重要な側面を持っている。つまり穀物法廃止は、Hardy も強調しているように、「外国との競争が穀物の取り引きに大変革を起こさせる」可能性に、道を開いたということである。この場合、外国から大量の穀物が入ってきたり、またその脅威がイギリスに「多くの技術における改良をもたらした」<sup>36)</sup>ということは、もはや穀物価格の相場が変動しないとか、投機の対象にならないとかを意味するのでは全然ない。それはただ、農作物の価格が天候によって左右される割合が、相対的に低くなったということと、Henchard の時代には単に狭い一地方の問題であったものが、もはや

35) A. L. モートン著、鈴木亮他訳『イングランド人民の歴史』(未来社, 1972), p. 338.

36) 同書, p. 340.

「他の地方の気候に無関心でいる」(p.185) ことができなくなってきたということを意味している。つまり Henchard の時代には単に「その時どきの地方の状況に応じて」起っていたことが、Hardy の執筆時には全国規模で、更には世界規模で行なわれるようになった、ということなのである。また投機の対象にされる農作物も、小麦ばかりではなく、その他の作物にも拡大されていった、ということなのである。

従って Henchard の運命は、Hardy の執筆時には、過去の話どころか、より大規模な形で起こり得たと言える。Farfrae が物語に登場してきた時、Bristol へ行き、そこから「地球の反対側、西部の大きな穀倉地帯」(p.50)、アメリカに渡るつもりでいたことは示唆的である。Farfrae の先見の明が、将来の「外国との競争」を、この時点で既に見越しているからである。

しかし Farfrae でさえ、国際的な資本主義市場で、どれだけ成功し続けることができるか

は、また別の問題になるだろう。Henchard の挫折が、Wessex 地方の「長い一連の、同様の交替劇の中で」<sup>37)</sup> 起こったように、Farfrae の運命もまた、舞台が広くなれば、Henchard と同様の過程を辿るかもしれないのである。

しかし Farfrae の物語は決して悲劇になりそうもない。何故なら Henchard の「性格」が持っている、「最も堂々たる事柄の底に横つてゐる悲しさ、……また最も悲しい事の底に横つてゐる堂々たるもの」<sup>38)</sup> を、Farfrae は持ち合せていないからである。そこに Hardy がこの Henchard の物語を、「一人の男の行動と性格を探求した作品」(p.v) と位置付けた理由があるだろう。そしてまた、Hardy がこういう Henchard 像を書いたあと、*Tess of the d'Urbervilles* や *Jude the Obscure* のような後期作品を書いたことは、その主人公達の悲劇の連続性という面から考えても、決して不思議ではなかったと思われる。

37) Gilmour, *op. cit.*, p. 191.

38) Hardy の日記より。宮島新三郎「創作前後の日記抄」 宮島新三郎訳『カスターブリッジの市長』前編(春陽堂, 1934), p. 3.